

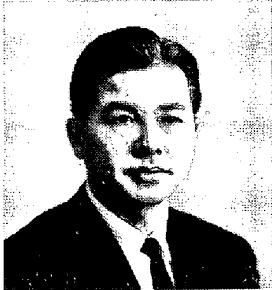
.....

## 随 想

.....

### 自然への還元

高 村 仁 一\*



あれほど激しかった大学紛争も表面的にはようやく鎮静期に入った。しかしこの Sturm und Drang ともいふべき時代の余韻はいましばらくは続くであろう。問題はこの時代における多くの提言のうちから何が真実として歴史の中に継承されるかであるが、紛争中に嘗めたさまざまな苦しみや悲しみあるいは怒りは、やがてわれわれの脳裡からはうすれ、そして忘れ去られようとしている。忘却—まことにそれは神の与えてくれた貴重な人間のさがであり、昨日の失意を明日への希望に昇華させる摂理でもあろうか。

忘却のない世界—それは情報革命の旗手といわれる電算機の世界、そこでは気まぐれな人間の注意力をはるかに上回つて、交通管制や生産プラントにおける安全性に対しては高い信頼度が期待される。しかし、もし電算機のように、人間にも忘却のない記憶の蓄積が行なわれるとすればやがては情報の氾濫の果てにその創造的主体性をすら喪失するおそれがある。今日の電算機のなしえないこと—それは人間のもつ忘却の複雑な過程、すなわち古い記憶をより信頼度の高いデータに更新すること、いわば連想のシステム—がやがて可能になつたとしても、電算機のなしうることはあくまでも現状の認識からの外挿による未来予測であつて、真の意味での創造や新技術の開発は終局的に人間にゆだねられることはいまでもない。

新技術の創出によって世の中の便利さは増す。しかし社会には便利さや効率だけで律しきれない面がある。イギリスが7億ポンドの巨費を投入し、アメリカの SST に先がけて 1973 年より就航すべく、フランスと共同開発中の超音速旅客機コンコルドの英内陸上空の超音速飛行を禁止した、このニュースはまだ耳新しい。これは超音速飛行のもたらす衝撃波による被害を防止するためであるが、限られた数の利用者の便利のために、航路に沿う何十何百万の人々が苦痛に果たして耐えねばならないかというのが禁止の理由であつたと聞く。このような問題は何もこの場合に限られたことではない。人間が何事によらず非常に威力あるものを創出したときにしばしば見られる現象であつて、薬品などのように人命と直接関係する場合には、とくに身近に痛感される。特効薬といわれるものは元来が両刃の剣なのでありその功罪は表裏の関係にあるといつても過言ではない。世の不眠に悩む人々の福音でもあつたサリドマイドが、一転して子を持つ親としてのこれらの人々を悲嘆のどん底に陥し入れた事件は、その最も不幸な例の一つである。

逆のケースもある。最初に悪魔の姿で世に現われたのが原子エネルギーである。人類の将来にとって計り知れない恵みとなるであろうこの原子エネルギーの、平和にして安全な利用のために費やされつつある莫大な努力は、たとえそれが当初は人類の破滅につながる原爆のもたらす放射能への恐怖によつて支えられたものであつたにせよ、人間の底知れない叡知を示すものにほかならない。原子エネルギーの利用によつて肝心なのは、拙速ではなく着実さなのである。いかにスピード時代とはいえ、科学技術の創出物が真に人類に益するものとなる確証を得るまでは、功をあせつてはなるまい。例のサリドマイド事件において示された一人の叡知—その薬が多発性神経炎を誘発する副作用をもつ—という一つの報告を

\* 本会理事 京都大学工学部長 工博

凝視して、使用許可をついにゆずらなかつた食料薬品局の F. O. KELSEY 女史の叡知は、アメリカにおけるエンゼル・ペービの出現を防いだのである。

Engineering とは人間の知的能力を活用して具体的なものを創り出すことであるとすれば、われわれは自らの創出物の行方をみまもる責任がある。いずれ人間は試行錯誤を繰り返す運命にあるとはいえ、科学技術者としての良心に裏づけられた信念と勇気が必要である。最近の関心事である公害の問題にしてもそうである。公害を批判することは比較的容易である。しかし企業の中にあつて技術者としての良心を賭けて決断し行動することは容易ではあるまい。科学技術に直接たずさわるものとして創造こそ無上の喜びではあるが、人類にとって科学技術の進歩が功罪相半ばするとの批判をうけないためにも、自らの創出物に対する回収あるいは自然への還元のサイクルを重視する必要がある。

1970 年代が人工創成物の廃棄過程における自然への還元が、新しいものの創出と同等の比重をもつて強調された時代として歴史にとどめられ、かつ 21 世紀には地球的規模で山紫水明の風土がよみがえるよう、心から望みたいものである。